

## 県民総力で取り組んだ福井国体 輝かしい成績が大きな誇りに



昭和48年福井国体開会式の様子（左） 昭和39年福井国体開会式の様子（右）

昭和48（1968）年10月1日、福井運動公園陸上競技場、約3万5000人の大観衆の中、福井国体秋季大会の開会式が行われました。会場には、前月29日に永平寺で採火された炬火が396人のリレーで到着。福井大学3年（当時）の辻野直子さんが炬火台に点火し、「明るく、きよく、たくましく」のスローガンを掲げた福井国体が幕を開けました。

開会にあたっては、道内豊饒などの事業も含めて県・市町村の関連予算が約10億円投入されました。財政へのしわ寄せも懸念されましたが、国からの財政支援などもあり、施設やインフラを次々と整備。本県の経済成長にも大きな寄与ができました。

また、この国体は国体史上最大規模の民泊でも話題になりました。「福井国体」の合言葉のもと、実施された民泊の総数は7市7町で2362軒、

受け入れ人数は1万956人に上りました。これは、監督・選手団の7割近くを占め中には、18人のバレーボールチームを丸ごと受け入れた家庭もありました。

男女総合順位の1位に与えられる「天皇杯」は、昭和39（1964）年から開催県が連続で獲得、前年の埼玉大会で得意順位をようやく24位に上げた福井県にとって、天皇杯は夢かと思われる状況でした。そんな中、本県選手団は体操やホッケー、馬術など計8種目で優勝、県民の期待に応える活躍を見せ、天皇杯総合優勝、女子総合の皇后杯も4位という輝かしい成果をあげたのです。

昭和39年の開催決定から4年、7万県民が総力で取り組んだ大イベントは、競技と運営の両面で成功を収め、人々の誇りと自信につながりました。